

奥州街道

おうしゅうかいどう

白石市-片倉領-

宮城県南口から
越河宿-斎川宿-白石宿-宮宿へ

参勤交代が整えた五街道
人々と文化が行き交う東北の大動脈、
奥州街道が紡いだ歴史に触れてみよう。

発行 一般社団法人 白石市観光協会
協力 白石街道研究会
『片倉家知行地絵図』(蔵王町教育委員会所蔵)

奥州街道

江戸時代、参勤交代の制度が確立すると全国的に交通網が整備された。江戸日本橋を起点として東海道、日光街道、奥州街道、中山道、甲州街道の五街道が設けられた。

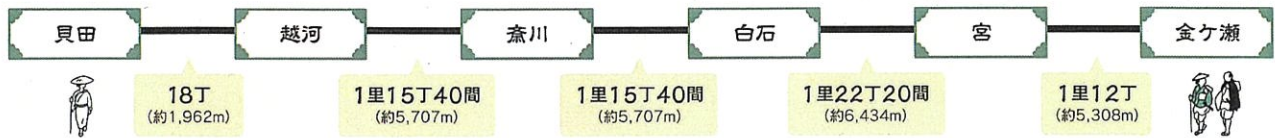
奥州街道においては、日光街道終点の白河宿から北は、青森・津軽半島の三厩まで続き、各地の大名が整備・管理を任せられた。東北太平洋側の諸大名の参勤交代や、商人・庶民などの通行で賑わった。19世紀初めには函館奉行所が置かれ、北辺の警備の必要性から交通量が増えた。

宿場を読み込んだ「道中歌」では片倉領宿場の上りは「…宮立れば とも白石鐘越し 斎川なれど越河の関…」、下りは「越河で 壺呑めは 斎川も おも白石と 宮か金ヶ瀬…」とある。仙台市の芭蕉の辻から江戸日本橋まで六十九次九十三里と謳われていた。

奥州街道の前身は、鎌倉時代には奥大道、それ以前の大和朝廷時代は東山道(あずま街道)と呼ばれていた。確かな道筋を示す文献は今のところ見当たらないが、奥州街道と重なる部分が多いと言われている。

【片倉領奥州街道各宿場間の距離】

※1里=36丁(町)≒4km、1丁(町)=60間≒109m、1間≒1.8mとして計算



一里塚

幕府は日本橋を起点として主要街道に一里塚「一里は36町(約4km)」を設けて、旅人にとって距離の目安とした。また街道沿いには松などが並木状に植えられ、木陰では休息の場となった。一里塚は9m四方の円錐状の土盛りであった。白石は江戸から80里(320km)。その一里塚は田町口付近にあったと言われている。

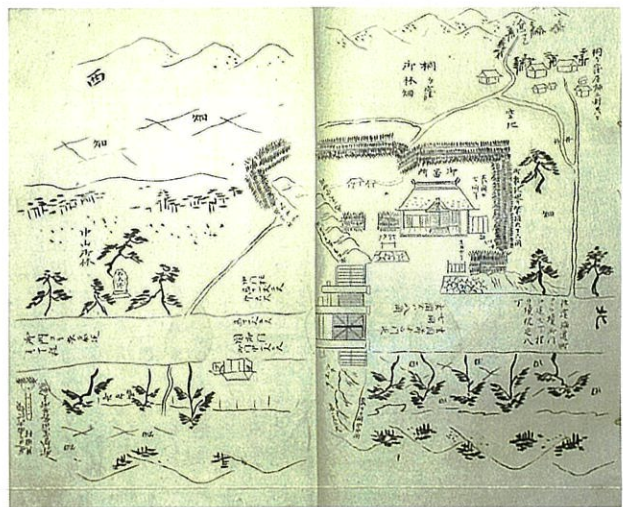
宿場(宿駅)と検断の役割

片倉領の奥州街道には、越河宿、斎川宿、白石宿、宮宿の4つの宿場があった。宿場は「検断」の支配下で、村の部分は「肝入」の所管である。「検断」は、奥州街道に関わる仙台藩の役割を担うことから仙台藩の任命となるが、片倉領内は「一門知行」であることから、片倉家も関与した。なお、白石宿は6つの町(新町、短ヶ町、互里町、長町、中町、本町)があり、交代で宿場の役割を果たしたとされるが詳細は不明なところが多い。

「検断」の役割は「人馬縦立」を円滑に行うことで、検断屋敷の「問屋場・役所前」では通行人の往来や商品等の輸送を取り締まっていた。伝馬制度の下で、幕府役人などの公用旅行者には無償で、私用の旅行者にはその時の相場で人馬を貸し与えた。奥州街道では、各宿場に「人馬、25人、25匹」を常備することが通例とされていたと言われている。

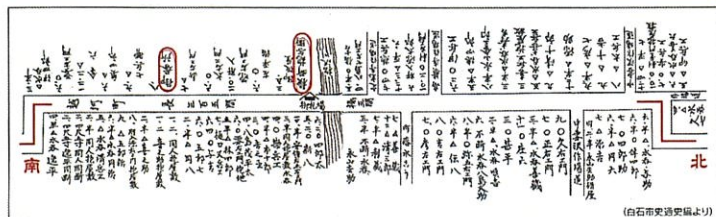
宿場内には本陣その他の旅籠屋や木賃宿があり、旅人の休憩や宿泊に利用された。宿場の出入口の道路は鍵型(L字型)になっており、見通しが利かなくなっている。道路は3間(約5.4m)とされ、中央には町中堀と呼ばれる堀割があり、左右の道路の進行方向が分けられるなど人馬の通行に便宜を図っていたものと考えられる。町中堀は明治の初めに全て埋められた。

越河御番所の「絵図」



「奥州仙台領遠見記 全」 仙台市博物館蔵

越河宿



越河宿の図。越河御番所が宿場の中にあるので、江戸時代初期の絵図と思われる。後に、福島藩との境付近に移っている。検断屋敷は宿場の中央、松沢川の側にあった。宿場の出入口は鍵型になっていて防衛上の工夫が見られる。



○御宿印販売所・越河宿、斎川宿、白石宿…白石城歴史探訪ミュージアム
宮宿…蔵王町観光案内所(遠刈田温泉)
※いずれも1枚300円で販売しています。